



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	LaF (Lëtzebuergesch als Friemsprouch) の現状 : 外国語としてのルクセンブルグ語教育と言語の拡充との相互作用
Author(s)	西出, 佳代
Citation	独語独文学研究年報, 41, 1-20
Issue Date	2015-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58326
Type	departmental bulletin paper
File Information	41_01_nishide.pdf



LaF (Lëtzebuergesch als Friemsprooch) の現状

—外国語としてのルクセンブルク語教育と言語の拡充との相互作用—

西出 佳代

1. はじめに

絶滅の危機に瀕する少数言語や方言が多い今日、1984 年言語法によりドイツ語の一方言（西モーゼルフランケン方言、Westmoselfränkisch）からルクセンブルク大公国の「国語」¹⁾へと昇格したルクセンブルク語（lux. Lëtzebuergesch）は、非常に稀な拡充言語（Ausbausprache）²⁾の例の一つである。話者数約 40 万人程度³⁾の同言語は、決して大きな言語とは言えず、UNESCO の「危機言語」（engl. “endangered languages”）の基準によると、「脆弱な言語」（engl. “vulnerable languages”）に分類される⁴⁾。少数言語の一つに分類される同言語であるが、上記の 1984 年言語法の制定以来、主に話し言葉において、その使用領域を着々と拡大しつつあり、順調に成長を続けている。ルクセンブルク語は、言語としての拡充がアクチュアルに観察できる、非常に貴重な例なのである。本稿では、ルクセンブルク語がさらに拡充・発展を続ける際の課題や問題点などを、非母語話者への語学教育という観点から検証し、今後の展望を提示することを目的とする。

第 2 節ではルクセンブルク語学習者について焦点を当て、2012 年に筆者が行ったアンケート調査の結果などを参照しながら、今日のルクセンブルクで同言語を学ぶ外国人が増える背景について考察を加える。第 3 節では、教育者側の観点から、3.1 教育環境、3.2 教育内容、3.3 教材、3.4 実践という 4 つのトピックについて、2012 年のアンケート調査の回答をまとめる。第 4 節では、上の議論をまとめ、ルクセンブルク語教育の問題と言語としてのさらなる発展の問題を関連付けながら、考察を加え、今後の課題を提示する。

¹⁾ 「国語」という表現は、1984 年言語法の条文に記載されている fr. “langue nationale” を筆者が和訳したものである（<http://www.legilux.public.lu/leg/a/archives/1984/0016/a016.pdf>）。

²⁾ H. Kloss による社会言語学用語（Glück 2005: 71）。ある言語変種（Varietät）は、書き言葉化、標準語化や専門用語の発展、専門書での使用などによって「拡充」される。ルクセンブルク語は、ゲルマン語の中でもっとも新しい拡充言語とされている（Glück 2005: 391）。専門用語の発展や専門書での使用はまだほとんど観察されないものの、文学作品を中心とする書き言葉の領域におけるルクセンブルク語使用の歴史は、同国で「古典」（Klassik）と呼ばれる 19 世紀の方言文学まで遡り、それが 1984 年言語法の制定や今日言語としての発展へとつながる基盤となっている。

³⁾ ルクセンブルク人の人口は約 30 万人であるが（Statec 参照）、ベルギーのアロン（Arlon）など国外にもルクセンブルク語が使用される地域がある。また、ルクセンブルク国籍を持たないものであっても同国で生まれ育った者の中には、ルクセンブルク語を使用するものも多い。約 40 万人という話者数はこのような話者も含めての数字だと考えられる。

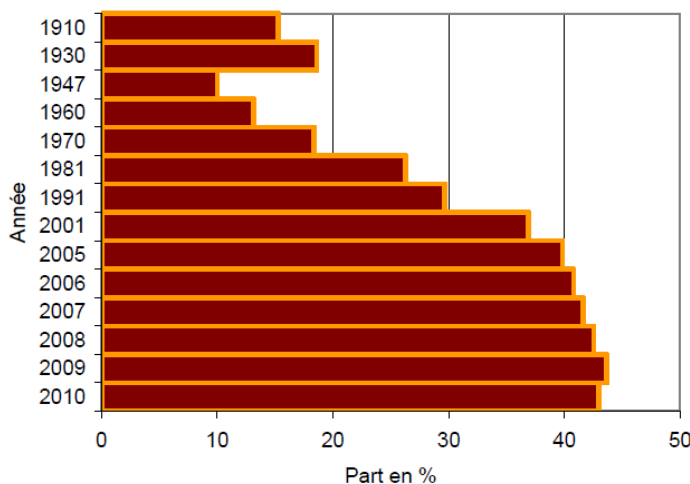
⁴⁾ <http://www.unesco.org/new/en/culture/themes/endangered-languages/> 参照（2015.2.1 閲覧）。

2. 増えるルクセンブルク語学習者

まず、本稿では「外国語としてのルクセンブルク語」(lux. Lëtzebuergesch als Friemsprouch, dt. Luxemburgisch als Fremdsprache: LaF)を考察の対象としているため、ここでの「ルクセンブルク語学習者」とは、ルクセンブルク語非母語話者を指す。ルクセンブルク語は、ルクセンブルク大公国の他に、ベルギーの一部の地域(Arlon など)で話されているが、現時点で同言語を習得できる語学学校などの教育機関があるのはルクセンブルク大公国内に限られるため、本稿では、ルクセンブルク国内のルクセンブルク語教育を議論の対象とする。

ルクセンブルクを代表する新聞の一つ *Luxemburger Wort* 紙に2014年10月に掲載されたエディトリアルでは、「今日、需要に応じてこれまでにないほど多くのルクセンブルク語講座が外国人向けに提供されている」との記述がある⁵⁾。ルクセンブルク語学習の需要増加の背景には、そもそもその学習者となりうる外国人(潜在的学習者)が同国内に多いこと、そして、これら潜在的な学習者が実際の LaF 学習者となる要因がいくつか重なりあっていることが考えられる。

グラフ 1. 総人口に対する外国人の割合の変遷⁶⁾



まず、潜在的な学習者、すなわちルクセンブルクに在住する外国人が多いことについて

⁵ „Aufgrund entsprechender Nachfrage werden derzeit so viele Luxemburgisch-Kurse für Ausländer angeboten wie nie zuvor.“ Claude Feyereisen „Editorial – Mir schwätze Lëtzebuergesch“ In: *Luxemburger Wort* (オンライン版、2014.10.17 公開) <http://www.wort.lu/de/politik/editorial-mir-schwaetze-letzebuergesch-54409898b9b3988708079e90> (2015.2.1 閲覧)

⁶ fr. Année: 年、fr. Part en %: 総人口に占める割合 (%)。Statec より (<http://www.statistiques.public.lu/catalogue-publications/regards/2010/PDF-3-2010.pdf>) (2015.2.1)。上のグラフでは2010年までのデータしか示されていないが、2014年現在の外国人の割合は、45.3%である (<http://www.statistiques.public.lu/stat/TableViewer/tableView.aspx>) (2015.2.1)。

て確認する。現在のルクセンブルクは世界でも有数の経済大国だが、この経済力の源となったのは、1870 年代に始まった鉄鋼業の発展である。鉄鉱山が発見された南部のミネット (Minett) 地方では製鉄所が相次いで建設され、小国であったルクセンブルクは労働力として外国人を大量に受け入れた。主要な外国人労働者の国籍は、初めはドイツであったが (1875-1930 年代)、次いでイタリア (1892-1950 年代)、そしてポルトガル (1960 年代以降) へと移った (Trausch et al. 2003: 227-229)。ルクセンブルクは鉄鋼業で得た資本をもとに、主に金融業で経済を発展させた。豊かなこの国を目指して入国してくる移民は、第二次世界大戦の時期を除いて着々と増え、ここ 10 年では、常に総人口の 4 割以上を占めるほどになった (グラフ 1⁷⁾)。

さらに、ルクセンブルクの首都ルクセンブルク市は、現在、ブリュッセルやストラスブールと並ぶ EU (欧州連合) の拠点都市となっている。欧州投資銀行、欧州会計監査院、欧州連合統計局 (ユーロスタット)、欧州司法裁判所など、EU の関連機関が多く設置されるこの街は、ヨーロッパでも有数の国際都市である。ルクセンブルクの総人口は、2014 年現在、約 55 万人で、その約 45% に当たる約 25 万人は外国人とされている⁸⁾。

外国人、すなわち潜在的な学習者の多さは、LaF 学習者が増える重要な要因の一つに数えられるが、それだけでは現在のルクセンブルクにおける学習者の増加を説明することはできない。同国在住の全ての外国人がルクセンブルク語の習得に積極的であるとは限らないからである。以下では、イタリア系 3 世のジャン・ポルタント (Jean Portante, 1950-) による移民文学の代表作『ハロイ婦人もしくはクジラの記憶』(fr. *Mrs Haroy ou la mémoire de la baleine* (原題通り)) (Portante 1993) からの一節を引用する⁹⁾。

「しかし、お母さんも」と、父が続けた。「もう少しあの言葉を習得しようとしなければ。」それは、まるでナイフで傷口をえぐるような言葉だった。私の母は、その話題を嫌がった。まるで割れた瓶のように耳障りな言葉、どうしてそんなものを。聞いて理解する分にはいい。しかし、話すのは絶対に嫌だ。(Jean Portante 1993: 199、和訳は筆者)

この作品は、哺乳類として肺呼吸を続けながらも海中で生きることを余儀なくされ、

⁷ Statec より <http://www.statistiques.public.lu/catalogue-publications/regards/2010/PDF-3-2010.pdf> (2015.2.1) 上のグラフでは 2010 年までのデータしか示されていないが、2014 年現在の外国人の割合は、45.3% である (Statec http://www.statistiques.public.lu/stat/TableViewer/tableView.aspx?ReportId=384&IF_Language=fra&MainTheme=2&FldrName=1) (2015.2.1)。

⁸ Statec 参照 (2015.2.1)。

⁹ 移民の多いルクセンブルクでは、「移民文学」(Migrantenliteratur) というジャンルが比較的確立されており、その中でも高い評価を受けている作家の一人がジャン・ポルタントである。上で挙げた彼の代表作は、ルクセンブルクの代表的な文学賞の一つ「セルヴェ財団賞」を受賞している。ポルタントは、2006 年からフランスのアカデミー・マラルメ (Académie Mallarmé) の会員にもなっており、国際的に活躍する文筆家の一人である。

かといってヒレに変わってしまった四肢では陸上に戻ることもできないクジラの悲劇を (Jean Portante 1993: 162)、ルクセンブルクに住む移民の姿と重ね合わせ、そのアイデンティティの揺らぎをテーマとした作品である。フィクションではあるが、ルクセンブルク社会とそこで暮らす移民の状況を描いた作品として高い評価を受けている。ルクセンブルク社会への統合をめぐる家庭内での葛藤——攫千金を目指してルクセンブルクに移住し、その社会に積極的に溶け込もうとする父親と、それに嫌々着いてきたホームシックに苦しむ家族との対立——は、第一世代の移民の間では珍しくなかったのではないかと考えられる。移民、すなわち非母語話者の数が増えるほど、ルクセンブルク語母語話者はマイノリティとなるため、移民の増加自体は、本来、少数言語であるルクセンブルク語にとって脅威のはずである。しかしながら、現在のルクセンブルクの状況で注目すべきは、非母語話者の存在が脅威としてではなく、潜在的な学習者、ひいては潜在的な話者としてプラスに機能している点である。以下では、これら外国人が LaF 学習者となる要因について考察を加える。

まず大きな要因として考えられるのが、1984 年言語法によるルクセンブルク語の言語への昇格である。19 世紀前半からルクセンブルク方言文学が盛んになるが、20 世紀に入るところには、ルクセンブルク方言はルクセンブルク人のアイデンティティの重要なシンボルとなっていた。1912 年ミシェル・ヴェルター (Michel Welter) 議員は国会の場で 3 言語併用 („Trilinguism“) という表現を用い、ルクセンブルクでのフランス語、ドイツ語、そしてルクセンブルク語 (方言) の使用について言及している (Tausch 1992: 109-110)。ヴェルターは、当時大公国の公用語とされていたフランス語とドイツ語がルクセンブルク人にとっては「外国語」であると述べ、学校教科書などにおける「ドイツ語は私たちの母語である」との記述が偽りで、ルクセンブルク人の母語はルクセンブルク語だと主張している (Tausch 1992: 110)。1984 年言語法は、ドイツ語の一方言として使用されていたルクセンブルク語を国語として昇格させることで、ドイツ語とフランス語にルクセンブルク語を加えた 3 言語併用を法的に認めるものであったと言える。

次に、ルクセンブルク語の使用領域の拡大を、同言語の学習者が増える要因の一つとして考える。ルクセンブルクは、現在、公用語であるドイツ語とフランス語に国語であるルクセンブルク語を加えた 3 言語が併用される多言語国家である。地域ごとに使用言語が異なるスイスやベルギーなどの国と異なり、ルクセンブルクではその全領土で上の 3 言語が場面や状況に応じて使い分けられている¹⁰⁾。これら 3 言語の使用領域について、Gilles (2011) が以下の 4 つの基準を用いて具体的にまとめているため、以下で引用する (和訳は筆者)。

¹⁰⁾ 社会における多言語併用をポリグロシヤ (Polyglossie)、個人による多言語併用をマルチリンガリズム (Multilingualismus) と呼ぶ (Glück 2005: 102-103, 145)。また、多言語併用話者による言語の切り替えをコードスイッチング (code switching) という。

<4 つの基準>

1. 媒介：書き言葉 vs. 話し言葉
2. 観念：「書き言葉」的 ↔ 「話し言葉」的
3. 同時性：同時—ほぼ同時—非同時
4. 言語：ルクセンブルク語 (L) —ドイツ語 (D) —フランス語 (F) ¹¹⁾

通常「話し言葉」と「書き言葉」というときには、その媒介を指し、口頭コミュニケーションを「話し言葉」、文字によるコミュニケーションを「書き言葉」と呼ぶことが多い。しかし、複雑に入り組むルクセンブルクでの言語使用を理解する際には、これに概念上どちらのコミュニケーションに近いかという視点を持つ必要がある。例えば、インターネット上でのチャットや SMS (short message service) でのコミュニケーションは、媒介上は文字を用いた「書き言葉」であるが、実際の文体としては「話し言葉」に近く、概念上は「話し言葉」性が高いと判断される。あるいは、媒介上は「話し言葉」であっても、学術的な研究発表の場などで用いられる言葉は、概念上は「書き言葉」性が高いと判断できる。Gilles (2011) では、これに加えて同時性、もしくは即時性にも着目している。口頭コミュニケーションの話し言葉の方が、通常は同時性が高く、文字を用いる書き言葉の方が同時性は低いと考えられるが、例えば原稿を読み上げる形でのテレビ・ラジオ放送などは媒介的には話し言葉であっても同時性は低く、チャットは文字を用いる書き言葉であっても同時性が高い。これらの基準に従って上記の 3 言語の使用領域を細分化し、まとめたものが表 1¹²⁾ である (Gilles 2011 参照)。また、ルクセンブルク語は、媒介的に「話し言葉」として実現される領域なら国会の議論の場など非常に公的な場面でも使用され、さらにたとえ媒介的には「書き言葉」であっても概念的に「話し言葉」的であれば、親密な相手とのチャットやメールなどでよく使用されることがわかる。

あらたまったコミュニケーションでは、チャットでもまだフランス語が使用されることがあり、たとえ親密な相手とのコミュニケーションでも紙媒体の手紙の場合は、ドイツ語やフランス語が使用されることがある。また、学術論文や研究発表など、概念上「書き言葉」性が非常に高い領域では、依然としてドイツ語やフランス語の使用の方が優勢である。しかし、方言であった時代には、媒介上「話し言葉」で、概念上も「話し言葉」性が高い領域でしか使用されていなかったと考えられるのに対し、現在のルクセンブル

¹¹⁾ 1. Medialität (mediale Realisierungsweise): medial schriftlich versus medial mündlich (Dichotomie),

2. Konzeption: konzeptionell schriftlich bis konzeptionell mündlich (Kontinuum),

3. Synchronizität: synchron – quasi-synchron – asynchron,

4. Sprache: Luxemburgisch – Deutsch – Französisch. (Gilles 2011: 49)

¹²⁾ 表 1 の中で、「RTL のニュース」の項目が (L) となっているが、これは RTL (Radio Télévision Luxembourg) がルクセンブルク語で放送を行うルクセンブルクのラジオテレビ局であるためである。ルクセンブルクでは、いくつかのルクセンブルクの放送局の番組に加えて、ドイツやフランスの放送局の番組が日常的に視聴されている。

ク語は媒介上「話し言葉」であれば概念上「書き言葉」性の高い領域や、媒介上は「書き言葉」であっても概念上「話し言葉」性の高い領域へと、着実に使用領域を拡大しつつあると言える。同言語の使用領域の拡大は非母語話者が同言語に触れる機会が増えることをも意味するため、LaF 学習者の増加に少なからず影響を及ぼしていると考えられる。

表1. ルクセンブルグ語の使用領域 (Gilles 2011 参照)

概念上「話し言葉」的 ←										→ 概念上「書き言葉」的									
媒介: 話し言葉		同時	日常会話 (L)			ラジオでの告知 (L)	宣伝 (L)	スピーチ (L/F) (教会での)説教 (L)	RTLのニュース (L) 公的機関の電話窓口 (F/D/E/L)	礼拝 (F/D) 学術的な口頭発表 (F/D)									
		非同時		留守番電話 (プライベート) (L)			国会討論 (L)												
媒介: 書き言葉		同時	チャット (親密な相手と) (L)			チャット (あらたまった相手と) (L/F)													
		非同時	SMS (プライベート) (L) SMS (挨拶) (L)	インターネットフォーラム (L)		Eメール (親密な相手と) (L) 手紙 (親密な相手と) (L/D/F)	報告書 (L) 議員へのインタビューの書写 (L)	広告 (F/L) 新聞・雑誌 (D/F)	政府のインターネット (F)	諸テキスト、文書 (F/D/L) ウィキペディア (L)			学術論文 (F/E/D) 法律 (F)						

筆者が2012年にルクセンブルク語を学ぶ成人外国人85人を対象に行ったアンケート調査結果の分析から、1984年言語法と使用領域の拡大以外にも、学習者が増える要因があることが推察される。以下では、以下の質問項目の中から、本稿の議論にとって重要と考えられる項目をピックアップして結果を示し、分析を行う。

- ・性別、年齢（10-19, 20-29, 30-39, 40-49, 50-59, 60-69, 70-）、職業、国籍、母語
- ・ルクセンブルク生まれか、そうでなければいつからルクセンブルクに住んでいるか。
- ・ルクセンブルク語を学び始めてどれくらいだったか。
- ・母語とルクセンブルク語以外に何語を話すか。
- ・なぜルクセンブルク語を学び始めたのか。
- ・どの程度の頻度でルクセンブルク語を使用するか（週に1-2日、3-4日、それ以上）。
- ・ルクセンブルク語を話す家族や友達、職場の同僚は何人か。
- ・ルクセンブルク社会に統合（Integration）するために、ルクセンブルク語を学ぶことは必要だと思うか。
- ・言葉の問題で、ルクセンブルク社会への統合が困難だと感じたことはあるか。それはどのような場面なのか。

まず、アンケート協力者の国籍の内訳を以下で示す：

表 2. アンケート協力者（ルクセンブルク語学習者）の国籍内訳

フランス	24人（内2人がルクセンブルクとの二重国籍）
ベルギー	10人（内1人がルクセンブルクとの二重国籍）
ドイツ	9人（内1人がルクセンブルクとの二重国籍）
ポルトガル	7人
イラン	3人
ルクセンブルク	2人（30代と40代）
イタリア	2人
スペイン	2人
デンマーク	2人
ロシア	2人
ハンガリー	2人
その他ヨーロッパ出身	5人
アフリカ出身	7人
アメリカ大陸出身	2人
アジア出身	1人

ルクセンブルクと国境を接するフランス、ベルギー、ドイツ出身の外国人の他に、ポルトガル人が多いが、その他のヨーロッパの地域や中東、アフリカ、アメリカ、アジアの出身者など、非常に多彩な国籍の外国人がルクセンブルク語を学んでいる。中には、ルクセンブルク国籍を持っているものもいるが、彼らの母語はルクセンブルク語ではない。上記のアンケート協力者の母語とその内訳は以下である：

表 3. アンケート協力者（ルクセンブルク語学習者）の母語内訳¹³⁾

フランス語	33 人
ポルトガル語	11 人
ドイツ語	10 人
英語	5 人
ペルシャ語	4 人
ロシア語	3 人
イタリア語	2 人
スペイン語	2 人
デンマーク語	2 人
ハンガリー語	2 人
その他ヨーロッパ言語	5 人
アフリカの言語（バンツール語等）	9 人
アジア言語	1 人

学習者の母語を観察すると、フランス語が非常に多いことがわかる。フランス語の母語話者には、フランス人とベルギーのフランス語地域出身者、フランス語を公用語とするアフリカの出身者などが含まれる。

既述のように、国全体で見ると、2014 年現在で外国人は総人口の約 45%を占めているが、その内訳でもっとも多いのがポルトガル人、次いでフランス人、そして、イタリア人とベルギー人がほぼ同じ割合でそれに続いている。国境を接するドイツは、それに次ぐ第 5 位を占めている（グラフ 2¹⁴⁾）。上位を占める国籍を見ると、ルクセンブルクに住む多くの外国人がロマンス語圏の出身であることがわかる。移民や外国人は、接客業などに従事することが多いため、ルクセンブルクの街ではフランス語が多くの人に通じるリンガ・フランカ（lingua franca）として使用されることが多い。

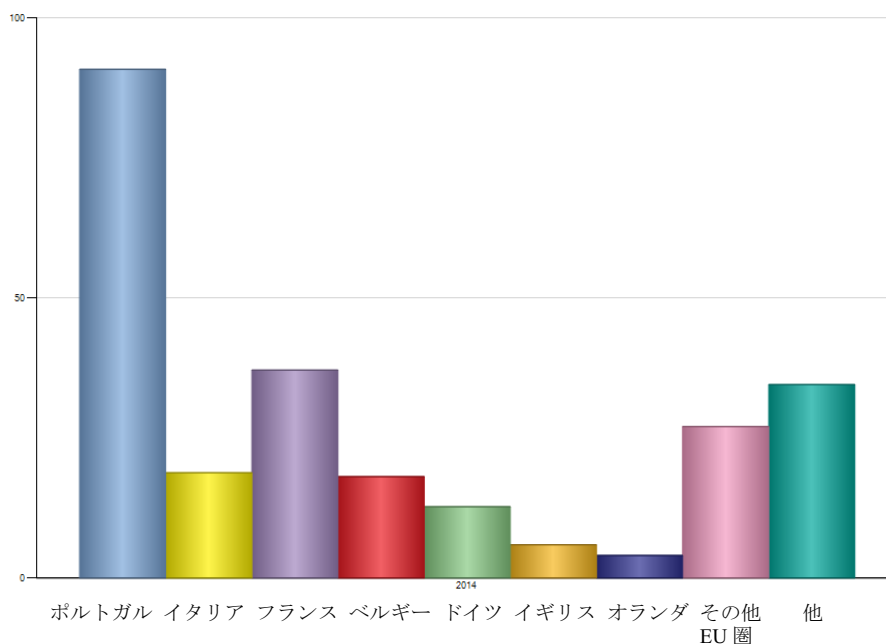
フランス語がリンガ・フランカとして使用されている背景には、同言語がルクセンブルクの歴史上、長く公用語だったことが関係していると考えられる。ルクセンブルクの

¹³ バイリンガルなどの多言語併用話者の場合は、複数言語に渡って人数に数えられているため、合計は協力者 85 人を超える人数になっている。

¹⁴ Statec より。http://www.statistiques.public.lu/fr/index.html (2015.2.1)

建国は 10 世紀にまで遡るが、当時この国はフランス語圏とドイツ語圏との 2 つの言語地域からなっていた (Tausch et al. 2003: 149-207)。1443 年ブルゴーニュ公国に支配権が移ったのをきっかけに、フランス語はこの国の公用語 („*offizielle Landessprache*“) となる (Fröhlich/Hoffmann 1997: 1159)。その後、ルクセンブルクの支配権は 1815 年ウィーン会議に至るまでヨーロッパの大国の間を行き来するが (Tausch et al. 2003: 155)、その間、フランス語は常に公用語、少なくとも対外的な役所言葉 („*äußere Amtssprache*“) としての地位を保った (Fröhlich/Hoffmann 1997: 1159)。1839 年ロンドン会議の後、ルクセンブルクは現在の領土になるが、これは同会議での協議の結果、ルクセンブルクのフランス語地域 (fr. “*quartier français*”) 全てとドイツ語 (ルクセンブルク・ドイツ語方言) 地域 (fr. “*quartier allemand*”) の一部をベルギーに割譲して残った領土である。したがって、ルクセンブルクは、ドイツ語地域、すなわち当時はまだドイツ語方言であったルクセンブルク語が話されていた単一の言語地域からなる国家となった。こうしてフランス語地域が失われた後も、フランス語は公用語としての地位と立法言語としての高いprestigeを維持した。ロマンス語圏出身の外国人がルクセンブルクに移住しやすく、またフランス語がリング・フランカとして使用される背景には、上のような同国の歴史的な言語状況が関係していると考えられる。ルクセンブルク語の学習者の中にロマンス語圏出身の外国人が多いのは、上で確認したようにそもそも同地域出身の外国人の絶対数が多いことが関係していると考えられる。

グラフ 2. ルクセンブルク在住の外国人の国籍別内訳 (×1,000 人、2014 年)



国籍と母語の他に、学習者の職業についても質問したが、こちらは多種多様で傾向はつかめなかった。強いて言えば、語学学校に通う時間を確保しやすいと考えられる主婦（主夫）や退職者が若干多かったが、就労しているものでも企業が語学講座の受講を義務付けている場合（以下の記述参照）は勤務時間内に語学学校に通えるため、就労している受講者も多かった。

また、アンケート協力者の中で、ルクセンブルクで生まれたのは3人であり、6人は越境労働者（dt. Grenzgänger, fr. frontalier）¹⁵⁾であった。それ以外は、最近ルクセンブルクに住み始めたという回答者が多く、最も長く住んでいる回答者で在住歴20年ほどのことであった。したがって、数世代に渡ってルクセンブルクに在住するイタリア移民などの背景を持つ学習者は、この度のアンケート回答者の中にはいなかった。このような移民の場合、下の世代はルクセンブルクで生まれ育っているため、幼稚園や学校、隣人とのコミュニケーションなどの場で、幼いころからルクセンブルク語に触れ、習得する機会に恵まれており、殊更に語学学校に行く必要が無いと考えられる。

ルクセンブルク語の学習歴については、2008年以降学習し始めたものが多く、それ以前から学習しているものは8人、最長の学習歴は14年だった。

以下では、ルクセンブルク語学習の動機についてのアンケート結果をまとめる：

表 4. ルクセンブルク語学習の動機

仕事のため	22 人
ルクセンブルク社会への統合のため	21 人
家族や隣人を理解するため	16 人
国籍取得のため	6 人

まず表4で、複数人によって回答された項目についてまとめている。最も多かったのは、「仕事のため」との回答だった。今日のルクセンブルクでは、雇用の条件としてルクセンブルク語の一定の語学力を必要とする企業や、すでに就労している外国人労働者にルクセンブルク語の語学学校に通って一定の語学力の習得を義務付ける企業が増えている。多言語併用話者が多数を占めるルクセンブルク人ではあるが、第二次世界大戦時に学校教育を受けた高齢者層は、フランス語の教育を受けていないため、フランス語のみによる接客に不自由を覚えるものも多い。より良い接客を目指すために、従業員にルクセンブルク語の語学力やその習得を条件付けたり、義務付けたりしているのである。ここで、これらの従業員が身につけるのがドイツ語ではなくルクセンブルク語だということに注目すべきであろう。ドイツ語のような大言語よりも、その習得が優先されるという点で、ルクセンブルク語が着実に言語としての地位を確立しつつあることがう

¹⁵⁾ ドイツ、フランス、ベルギーの周辺都市をベッドタウンとし、ルクセンブルクで就労する労働者を指す。

かがえる。既述のように、ルクセンブルク語を学ぶ外国人にはフランス語などのロマンス語を母語とする話者が多いが、彼らの中にはドイツ語よりも先にルクセンブルク語を学ぶものも多く、今日のルクセンブルクでは、ルクセンブルク語は話せてもドイツ語を話せない外国人も少なくない。

「仕事のため」と同程度に多い回答として、「ルクセンブルク社会への統合のため」という回答があった。このアンケート自体がそもそも語学学校に通っている外国人に対して行ったものであるため偏りのある結果ではあるが、上で挙げたジャン・ポルタントの作品中で描かれる時代と比較して、外国人がルクセンブルク社会への統合やそのための言語習得に対して積極的になりつつあることがうかがえる。

この回答は、次に多い「家族や隣人を理解するため」という回答とも関連している。先に述べたように、ルクセンブルクの街中ではフランス語がリング・フランカとして機能しており、役所関係の書類なども基本的にはフランス語（とドイツ語）で作成されるため、フランス語さえできればルクセンブルクでの実生活に支障をきたすことはない。しかし、よりルクセンブルク人に対する理解を深め、その社会に溶け込むには、彼らの母語であるルクセンブルク語を理解することは不可欠であるようだ。筆者が上のアンケートとは別に行ったルクセンブルク在住の日本人数人へのインタビューでは、ルクセンブルク語母語話者が多数を占める場面では、会話がルクセンブルク語で行われることが多いため、同言語が理解できないと疎外感を感じることがあるとの回答があった。これらのインタビュー協力者は、全てスペイン人、イギリス人、フランス人などを伴侶とする女性で、幼稚園などにおける母親同士の会話において特に疎外感を感じることが多いとのことであった。

「家族を理解するため」という回答の中では、特に自分の子供が話す言葉を理解するためという回答が多かった。ルクセンブルク在住の外国籍の子供の中には、幼稚園や学校など家庭の外でルクセンブルク語を習得し、使用するものが多い。そのため、子供が使用する言語に興味を示したり、もしくは子供の使用する言語を理解できないことに不安を覚えたりする両親が増えてきていると考えられる。

さらに、「国籍取得」を動機としてあげる回答者もいた。この回答には、2008年の国籍法改正が大きく関わっていると考えられる。2008年10月の改正法では、ヨーロッパ共通参照枠（CEFR: Common European Framework of Reference for Languages）の基準を基にした一定のルクセンブルク語能力を有することを、ルクセンブルク国籍取得のための条件として定めている。

2008年10月23日ルクセンブルク国籍法

第7条

1. 外国人の帰化は、以下の知識によって、ルクセンブルク社会に十分に統合していることを証明できなければ、受理されない：

- a) (略)
- b) 1984 年言語法によって定められた言語について十分な能動のおよび受動的な語学力を証明できない場合、また、ルクセンブルク語の口頭コミュニケーションの審査に合格していない場合。ルクセンブルク語に関して達成されるべき語学力は、口頭理解についてヨーロッパ共通参照枠の B1、口頭表現について A2 のレベルが求められる；
[...]¹⁶⁾

ルクセンブルクでは、1939 年にすでにルクセンブルク語の習得が国籍取得の条件として定められていたが (Moulin 2006: 308)、2008 年の法律では、必要な語学力を国際的な基準に従ってより具体的に明示した部分が改正されている。A1 から C2 までの 6 段階¹⁷⁾ のレベルのうち、ルクセンブルク国籍取得のために必要とされる B1 や A2 というレベルは決して高いものではない。また、一定の語学力を示す必要があるのは口頭コミュニケーション能力のみであり、読解力や作文能力は問題とされていない。書き言葉の領域における語学力については、母語話者に対しても学校教育などで十分に教育されていないことが関係していると考えられる。しかし、たとえ口頭コミュニケーションのみについての言及であるにせよ、上記の内容が国籍法において明文化されている点は、少数言語であるルクセンブルク語にとって非常に重要だと考えられる。

その他に同言語を学習する動機として、「ルクセンブルク人に対する敬意」や「ルクセンブルク語への興味」を挙げる回答者や、「語学が好きだから」と回答するものもいた。興味深いのは、比較的高齢の話者の回答で、「将来、老人ホームに入る場合に備えて」というものである。既述のように、第二次世界大戦のときのドイツによる占領下で学校教育を受けた世代のルクセンブルク人の中には、フランス語をあまり話せないものも多い。こうした高齢者とのコミュニケーションが重要となる場面では、ルクセンブルク語の語学力は非常に重要であると考えられる。

以上、この節では、ルクセンブルク語の学習者が増える背景について考察を加えた。今日、同言語の学習者が増える背景には、まず潜在的な学習者である外国人が多いことが前提条件として挙げられる。さらにこれらの外国人がルクセンブルク語を学び始める要因として、彼ら自身が統合に前向きになってきているということも挙げられるが、その他の外的な要因も重要な役割を果たしていると考えられる。すなわち、1984 年言語法によるルクセンブルク語の昇格、同言語の使用領域の拡大、雇用体制 (条件) の変化、国籍法の改正などである。これらの要因によって潜在的な学習者が実際の LaF 学習者となるというプロセスで、今日のルクセンブルク語学習者の増加は理解される。

¹⁶⁾ http://www.chd.lu/wps/PA_Archive/FTSShowAttachment?mime=application%2fpdf&id=978863&fn=978863.pdf (2015.2.1)

¹⁷⁾ 下から順に、A1, A2, B1, B2, C1, C2 の 6 段階で、C2 が最高レベルである。

3. ルクセンブルクにおける LaF (Lëtzebuegesch als Friemsprooch)

第2節では、学習者に焦点を当ててルクセンブルク語学習・教育について分析した。この節では、教師側の観点から分析を加える。筆者は、同じく2012年に8人のルクセンブルク語語学教師に対して、アンケート調査を行った。質問項目は以下である：

- ・ルクセンブルク語を教えてどのくらいになるか。
- ・他の言語を教えたことはあるか。もしある場合、それは何語か。
- ・現段階で、ルクセンブルク語学習教材は充実していると思うか。もし足りないと考える場合、どのような教材があるとよいと思うか。
- ・ルクセンブルク語を学ぶ学習者の動機にどのようなものがあると思うか。
- ・現在、上級レベル（例えばCEFRでC1やC2）のルクセンブルク語学習のクラスは開講されていない。将来的にこのようなレベルのクラスも開講する必要が出てくると思うか。その場合、どのような学習者が受講しに来ると思うか。

以下では、このアンケート結果を元に、教育内容(3.1)、教育環境(3.2)、教材(3.3)、実践(3.4)という観点から、外国語としてのルクセンブルク語教育の現状を把握する。

3.1 教育環境：語学学校と語学教師、学習後の語学能力証明など

ルクセンブルク大公国において、ルクセンブルク語を学ぶことができる語学学校は増えている。代表的な語学学校として、“Moien asbl.”¹⁸⁾ やルクセンブルク市役所(fr. Ville de Luxembourg)主催の語学教室がある。この度アンケート協力をお願いした8人の語学教師のうち、5人はこの2つのいずれか（もしくは両方）でルクセンブルク語を教授していた。これらの語学学校の他にも、ルクセンブルク語教育を提供する一般の語学学校も増えてきている。また、職場でのルクセンブルク語使用が増えるなどの理由から、アンケート協力者のうち残りの2人は銀行(BDL: fr. Banque de Luxembourg)でルクセンブルク語を教えているとのことであった（残りの1人は無回答）。

語学教師に関して、比較的教歴の長いアンケート回答者(5年以上の教歴を持つもの、最長で20年以上という回答者もいた)は、ルクセンブルク語以外にもドイツ語やフランス語、英語を教えた経験のあるものが多かったのに対し、比較的教歴の浅い回答者(教歴が5年未満のもの)は、ルクセンブルク語しか教えた経験がないというものが多かった。回答者の数が多くないため一概には言えないが、ルクセンブルク語教育の需要が増えるに従って、ルクセンブルク語のみの教育で生計が成り立つ教師が増えているのではないかと考えられる。さらに、ルクセンブルク大学では2006年にルクセンブルク語語学教師養成のための特別コース「ルクセンブルクの言語と文化」(fr. Formation continue “Lëtzebuenger Sprooch a Kultur”)を開設し、より質の高い教員養成に取り組んでいる。

¹⁸⁾ <http://www.moienasbl.lu/> (2015.2.1)

今後、ルクセンブルク語教育についての専門知識を持つ語学教師が増えることが予想される。

表 4 のアンケート結果からも明らかなように、今日、仕事のためにルクセンブルク語を勉強している学習者が多い。企業によっては就業時間内に外国人就労者を語学学校に通わるところも増えているため、上で挙げた語学学校 “Moien asbl.” などでは、企業向けの受講証明書も発行している。また、国立言語研究所 (fr. Institut national des langues)¹⁹⁾ では、国籍取得に必要なルクセンブルク語語学能力を測る試験「ルクセンブルク語語学試験」(lux. “Sproochentest Lëtzebuergesch”) を行っている。上で触れたように、国籍取得に必要なのは口頭コミュニケーションにおける理解力が CEFR で B1 程度、同じく口頭コミュニケーションにおける表現力が A2 程度である。現時点で、これらのレベル以上の口頭コミュニケーション能力や文章の読解力や筆記能力を測る試験はない。

3.2 教育内容：ルクセンブルク語と規範化

現在のルクセンブルク語には、正書法はあるものの、母語話者にもこれが定着しているとは言い難い状況である。ルクセンブルク語（もしくはルクセンブルク語文学）は、ルクセンブルクの小学校で週 1 時間程度教えられるだけであり²⁰⁾、ルクセンブルク語母語話者でも正書法の教育を受けていない場合が多い。ルクセンブルク語の語学学校では、より高いレベルの学習者向けに正書法の学習に重点をおいた講座を開講しているが、この講座には、外国人の学習者はもちろんのこと、ルクセンブルク語母語話者の受講も多いとのことである。

さらに文法については、その規範化が十分でないことが大きな問題点として挙げられる。ルクセンブルク語は、ドイツ語の一方言から独立した言語であるが、その内部にもさらに小さな方言差が存在する。Gilles (1999: 59-63) によると、ルクセンブルク領土内部の方言地域は、北部 („Norden“)、南部 („Süden“)、中央 („Zentrum“)、東部 („Osten“) に大別される。これらの方言の中で、北方言はケルン方言などが含まれるリプアリア方言と共通する「k の挿入」(k-Epenthese) が観察され (nordlux. [lekt], köl. Lück (Saint-Exupéry 2008: 9), zlux. Leit, dt. Leute) (Gilles 1999: 211-221))、南方言では、ロータリングン方言 (Lothringisch) やアレマン方言 (Alemannisch)²¹⁾ に特徴的な「s の口蓋化」(s- Palatalisierung) が観察される ([s] > [ʃ]: „Alemannismus“ Gilles 1999: 195)。また、都市化が進む中心部では、標準ドイツ語の影響を強く受けた形式が観察されたり、言語変化がより進んだ形式が観察されたりする一方で、南部や特に東部や北部など都心部から離れた地域では、古い形式が残りやすい (ahd. wetar, mhd. wet(ter) (dt. Wetter) > ostlux.

¹⁹⁾ <http://www.insl.lu/> (2015.2.1)

²⁰⁾ “Mém. A – 178 du 22 août 2011, p2990” (Règlement grand-ducal du 11 août 2011 fixant le plan d'études pour les quatre cycles de l'enseignement fondamental. (http://www.legilux.public.lu/leg/textescoordonnes/compilation/code_education_nationale/CHAPITRE_2.pdf)) (2015.2.1)。

²¹⁾ 上部ドイツ語の西部の方言で、スイスドイツ語などがこれに含まれる。

[ve:dø] (長音化) > zlux. Wieder [viədø] (二重母音化))。語学学校で教授されるルクセンブルク語は、上記の方言の中では中央方言に近い言語変種 (Varietät) と考えられる。しかし、実生活の中では、方言色の強い話し方をするルクセンブルク語母語話者もいるため、こうした方言差などをどこまで教授すべきか悩む教員も多い。ルクセンブルクの中では、南部に住む外国人が多いため、場合によっては、南方言について多少触れると実生活の中でより役に立つと考えられる。

上で挙げた方言差は音韻的な差であることが多く、口頭での理解力をつけるために場合によっては学習や教授が必要となるものである。ルクセンブルク語にはこの他に、語彙 (lux. Hues/Strëmp (dt. *Strumpf*) 「靴下」)、形態 (lux. geféiert/gefouert (dt. *geführt*) 「導かれた (過去分詞) 」) (Braun et al. (2005b))、統語 (lux. datt ech dat soll maachen/maache soll (dt. *dass ich das machen soll* 「私がそれをするべきであること」)) の面でも揺れが観察されるため、レベルが上がるほど教授が難しくなる。

現在の語学学校では、B1 レベルまでを到達の目標にした講座しか開講されておらず、それ以上のレベルの語学教育を受けられる場がない。アンケートでは、上級のレベル (C1, C2 レベル) の講座の開講について質問したが、ほとんどの回答者は需要がないだろうと回答した。少なくとも、国籍取得や仕事のために勉強している学習者が求められているルクセンブルク語の語学力は B1 程度であり、またルクセンブルク社会への統合を目指して学習しているものも、当面は日常会話レベルのルクセンブルク語能力があれば、目的は十分果たされる。上級クラスの開講は、実現されればルクセンブルク語の言語としての発展にとっても重要な一歩になるだろうとコメントした回答者もいたが、ただし現段階でそのようなクラスの開講は非現実的であろうとも述べていた。

3.3 教材：教科書と辞書

ルクセンブルク語の教科書は続々と出版されているが (Braun et al. (2005), Wolter (2011), Krier/Tonnar (Hrsg.) (2011))、内容としてはやはり A2~B1 レベルが対象となっており、コミュニケーション能力の習得、向上が目的のものである。文法事項について比較的詳しく扱った参考書として Schanen/Zimmer (2012) があるが、語学学校で使用する教師は非常に少ない。同文献は、主にルクセンブルク大学での語学教師養成コースで用いられることが多く、教員養成用のテキストとして用いられているようである。現在、外国人に対して求められている語学力に鑑みれば、コミュニケーション重視の教科書だけで需要に応えることができていると言える。ただし、既述のようにルクセンブルク語学習者の中には、ルクセンブルクの文化や社会、そして言語そのものに興味を持って学ぶ学習者もいる。B1 レベルに達した学習者が、さらに興味を持って学習を進めようとしたときに、参照できる教材がないことは大きな問題だと指摘する回答者がいた。また、アンケート調査時点で高い評価を受けていた教材は、Krier/Tonnar (Hrsg.) (2011) *Wat gelift? Lëtzebuergesch fir déi Jonk.* 『なんとおっしゃいましたか？若者のためのルクセンブ

ルク語』であるが、これらの多くの教材は青少年向けであることが多い。語学学校でルクセンブルク語を学んでいるのは、社会人や退職後の高齢者が多いため、大人も興味を持って学習できる教材の開発が、今後不可欠であるとの回答が多かった。

上級のレベルのルクセンブルク語の語学力をつけるためには、日常的なコミュニケーション能力だけでなく、ある程度の文法知識や語彙力が必要である。前者については、先に挙げた Schanen/Zimmer (2012) がもっとも詳しい文法書と言えるが、他の教科書とのレベルの差がかなり大きいので、その中間のレベルを想定した文法書作りが必要となる。Schanen/Zimmer (2012) は、B1 の語学力をつけただけの学習者には、難易度が高く、文法記述に特化した参考書であるために、学習者の興味を引く（文化紹介などの）配慮がなされていない。

後者の語彙力に関して、ルクセンブルク語に関する辞典がまだ足りていないと考える回答者が 2 人ほどいた。今日では、ルクセンブルク語を学ぶ外国人向けに多くの多言語辞典が出版されている。シャネン (Schanen) とルリング (Lulling) (ドイツ語版ではさらにヴェルシュビリヒ (Welschbillig)) らによって編纂された *Luxdico* のシリーズは、ドイツ語版、フランス語版、英語版が出版されている (Welschbillig/Schanen/Lulling 2008; Schanen/Lulling 2009; Schanen/Lulling 2012)。また、ツィマー (Zimmer) による『9000 語ルクセンブルク語辞典』(9000 *Wierder op Lëtzebuergesch* (Zimmer 2008)) は、ルクセンブルク語の見出し語 9000 語について、フランス語、ドイツ語、英語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語の対訳を付した辞書である。しかし、これらの辞書は、各見出し語に対応する語彙を載せているだけの、いわば語彙表にすぎず、詳しい説明や例文などは載せられていない。それに対し、『ドイツ語・ルクセンブルク語辞典』(*Deutsch-Luxemburgisches Wörterbuch*) (Derrmann-Loutsch 2004) と『フランス語・ルクセンブルク語辞典』(*Dictionnaire Français-Luxembourgeois*) (Derrmann-Loutsch 2006) とで対になっているシリーズでは、見出し語によっては例文や簡単な説明が掲載されている。しかし、このシリーズには、ルクセンブルク語を見出し語とするバージョンがなく、もっぱらルクセンブルク語非母語話者がルクセンブルク語作文をするときに用いるために編集された辞書と言える。オンラインの辞書としては、ルクセンブルク大学の研究室が提供している上記の辞書の他、ルクセンブルク文化省 (Ministère de la Culture) による辞書『ルクセンブルク語オンライン辞典』(*Lëtzebuurger Online Dictionnaire (LOD)*) がある (<http://www.lod.lu/>)。このオンライン辞典では、例文も比較的豊富に載せられており、また母語話者の発音を聴くことができる点でも利点がある。

以上で挙げた辞典は、全てルクセンブルク語学習者用に作られていると考えられるものであるが、同言語の辞典の中で最大の規模の辞典は全 5 巻の『ルクセンブルク語辞典』(*Luxemburger Wörterbuch* (1950-77)) である²²⁾。この辞典は、方言差も含めた詳細な記

²² 1950 年から 1975 年にかけて第 4 巻までが出版され、1977 年に補足版 (第 5 巻) が出版された。

述を載せた辞典であり、言語学的な価値も非常に高い。ユダヤ人やイスラム教徒に対する差別的な表現が多いなどの理由から、現在では絶版となっており、紙媒体での入手は困難となっているが、ルクセンブルク大学で電子化されており、同大学のルクセンブルク言語文学研究室のサイト“Infolux”でオンライン版を利用することができる(<http://Infolux.uni.lu/>)

このように、すでに複数のルクセンブルク語辞典が出版されているが、ルクセンブルク語のみで書かれた一言語辞典はまだ編纂されていない。ドイツ語方言から独立を遂げたルクセンブルク語にとって、『ルクセンブルク語辞典』のような専門性の高い辞典の再編纂に加えて、ルクセンブルク語のみで書かれた一言語辞典を編纂することは、ルクセンブルク語という言語そのものの発展にとっての重要な課題と言える。また、上級レベルの学習者にとっては、一言語辞典は一つの見出し語を引くだけで類義語なども学べる非常に重要な辞典である。より充実した辞典の編纂が、今後の大きな課題になると考えられる。

この他に、上級レベルの学習に進むにつれて、読解力をつけるためのテキストが必要を増すが、現行のルクセンブルク語正書法で書かれたテキスト自体の数が少なく、文学作品などに限定されることが多い。読解力を養うテキストのジャンルとしては、雑誌や新聞の記事なども必要になると考えられるが、こうした書き言葉の領域での言語使用は、今日のルクセンブルク社会においてもドイツ語やフランス語が優勢であり、ルクセンブルク語で書かれたテキストは少ない。また、現行の正書法での改訂版が再版されていない古い出版物も多いという問題点を挙げる回答者もいた。

3.4 実践：日常生活におけるルクセンブルク語

ドイツ語やフランス語などの他の大言語と比べて、ルクセンブルク語教育の難しさを問うアンケート項目では、ルクセンブルク語を実際の日常生活で使う機会が少ないということを挙げる回答者が多かった。ルクセンブルクの街中での会話の多くはフランス語（もしくは英語）でなされることが多いため、ルクセンブルク語が話せなくても、生活に支障をきたすことはない。また人口のうちに占める外国人率の多さから、初対面の相手がルクセンブルク語の母語話者であることを即座に判断できないことも多く、街中でルクセンブルク語を用いることが、かえってコミュニケーションの妨げとなることもある。

また、「外国人がルクセンブルク語を話そうとしても、母語話者が非協力的だ」という問題点を挙げる回答者もいた。ルクセンブルク人自身が、ドイツ語やフランス語、英語を高いレベルで使いこなす多言語併用話者であるため、まだ語学レベルの低い学習者がルクセンブルク語を話すのを辛抱強く聞こうとせず、別の言語に切り替えて話そうとする場合があるとのことである。コミュニケーションを円滑に効率よく行うためのコードスイッチと言えるが、それが言語習得の際には不利に働く場合があると言える。同様

の問題点は、学習者側のアンケートの回答においても指摘されている。日常生活において実践する機会が少なければ、それだけ語学力は伸び悩み、それがさらに実践の機会を奪うという悪循環に陥ることになる。

この他に、母語話者自身が学校教育においてルクセンブルク語の教育を受けていないため、正しい正書法で書くことに関しては、外国人のほうが母語話者に勝っている場合がある。このような場合に、母語話者からの反感を買うことがあるため、あまり熱心に勉強できないと答える学習者もいた。これらの問題は、ルクセンブルク語を学ぶ外国人が増えている現状に母語話者自身が対応し切れていない事実を示すものと考えられる。語学学校や語学教師を増やすだけでなく、将来的にはルクセンブルク社会全体でルクセンブルク語学習者を受け入れる環境を整えることが必要だと考えられる。

以上、4つの観点から、LaFの現状についてまとめた。まず、ルクセンブルク語の規範化が十分進んでいないこと、また特に書き言葉の領域での使用がまだ少ないことから、上級レベルの語学教育が難しく、またその需要（上級レベルの検定試験や上級レベルの語学力を問う法律など）もないため、現在のルクセンブルクでは中級レベル以下の内容しか教えられていないことが明らかとなった。さらに、非母語話者の実践の機会を増やすために、母語話者側の受け入れ態勢について考えることも今後の大きな課題と言える。

4. おわりに—ルクセンブルク語教育と言語の規範化

本稿の冒頭で、ルクセンブルク語が UNESCO の基準では「脆弱な言語」という、最も軽度とはいえ危機言語の一つとして分類されているということについて触れた。しかし、この分類については、実情に合わないとする声もある。ルクセンブルクを代表する新聞の一つ *Luxemburger Wort* は、2013 年 9 月、UNESCO によるこの分類に疑問を呈する記事を載せおり、そこでは外国人や越境労働者も含めた約 50 万人が日常的にルクセンブルク語を使用しているという見解を引用している²³⁾。確かに、方言から言語へと昇格してからおよそ 30 年、右肩上がりの勢いを見せるルクセンブルク語は、絶滅の危機に瀕しているという印象からは程遠い。しかしながら、本稿で観察したルクセンブルク語教育の現状に鑑みれば、外国人や越境労働者も含めた話者数のみを見て、ルクセンブルク語が危機に瀕していないと言い切るのは問題があると考えられる。語学学校で教授されるルクセンブルク語は中級レベル以下であるため、多くの外国人や越境労働者が使用しているルクセンブルク語は一種のピジンである可能性がある。語学学校で教授するレベルを上げずに、このまま中級レベル程度の話者の数が増えていけば、ルクセンブルク語は数の上では脅かされることはなくても、質の上で変化する、すなわちクレオール

²³⁾ „Ist Luxemburgisch vom Aussterben bedroht?“（オンライン版、2013.9.20 公開）<http://www.wort.lu/de/lokales/ist-luxemburgisch-vom-aussterben-bedroht-5249d3fee4b0a2cd5f321f9e>（2015.2.1 閲覧）。

化する可能性があるのである。もちろんクレオール化という言語変化自体は、問題視されるものではない。しかし、母語話者は少なくともこの可能性を認識し、それに対する姿勢を明確にする必要があるだろう。クレオール化を防ごうとすれば、非母語話者に対する上級レベルの語学教育が不可欠になると考えられるが、そのためには規範化を進める、使用領域を増やすなど、言語の拡充にとっても必要なプロセスをさらに進める必要がある。ルクセンブルク人が今後どのように非母語話者を受け入れ、言語を発展させていくのかという問題は、拡充言語の例が少ない今日、我々に多くの示唆を与えてくれる興味深いテーマの一つである。

参考文献・参照 URL

- Braun, Josy/Joanns-Schlechter, Marianne/Kauffmann-Frantz, Josée/Losch, Henri/Magnette-Barthel, Geneviève en collaboration avec Projet Moien (2005): *Grammaire de la langue luxembourgeoise – Grammaire vun der lëtzebuenger Sprooch*. Mamer: Ministère de l'éducation nationale et de la formation professionnelle.
- Chambre des députés du grand-duché de Luxembourg: <http://www.chd.lu/> (2015.2.1)
- Derrmann-Loutsch, Liette (2003): *Deutsch-Luxemburgisches Wörterbuch*. Luxembourg: Editions Saint-Paul.
- Derrmann-Loutsch, Liette (2006): *Dictionnaire français-luxembourgeois*. Luxembourg: Editions Saint-Paul.
- Fröhlich, Harald/Fernand Hoffmann (1997): „141. Luxemburg.“ In: Goebel, Hans et al. (Hrsg.) *Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft. Kontaktlinguistik*. Vol. 2. Berlin/New York: Walter de Gruyter, 1158-1172.
- Gilles, Peter (1999): *Dialektausgleich im Lëtzebuergeschen. Zur phonetisch- phonologischen Fokussierung einer Nationalsprache*. Tübingen: Niemeyer.
- Gilles, Peter (2011): „Mündlichkeit und Schriftlichkeit in der luxemburgischen Sprachgemeinschaft.“ In: Mein, Georg/Siebug, Heinz (Hrsg.) (2011): *Medien des Wissens. Interdisziplinäre Aspekte von Medialität*. Bielefeld: Transcription Verlag, 43-64.
- Glück, Helmut (Hrsg.) (2005³): *Metzler Lexikon. Sprache*. Stuttgart/Weimar: Metzler.
- Infolux: <http://Infolux.uni.lu/> (2015.2.1)
- Institut national des langues: <http://www.insl.lu/> (2015.2.1)
- Krier, Marguerite/Tonnar, Christiane (Hrsg.) (2011): *Wat gelift? Lëtzebuergesch fir déi Jonk*. Luxembourg: Ministère de l'éducation nationale et de la formation professionnelle.
- Legilux: <http://www.legilux.public.lu/> (2015.2.1)
- Luxemburger Wort (online): <http://www.wort.lu/> (2015.2.1)
- Luxemburger Wörterbuch (LWB) (1950-77): Wörterbuchkommission (Hrsg.) auf Grund der

- Sammlungen, die seit 1925 von der Luxemburgischen Sprachgesellschaft und seit 1935 von der Sprachwissenschaftlichen Sektion des Großherzoglichen Instituts. Luxemburg: P. Linden.
- Moien asbl.*: <http://www.moienasbl.lu/> (2015.2.1)
- Portante, Jean (1993): *Mrs Haroy ou la mémoire de la baleine*. Echternach: Editions Phi.
- Saint-Exupéry, Antoine de (2008⁶): *Dä kleine Prinz*. Us dem Französische en et Kölsche üvverdrage vum Volker Gröbe un vum Alice Tiling-Herrwegen. Nidderau: Verlag M. Naumann.
- Schanen, François/Lulling, Jérôme (2009): *Luxdico. Lëtzebuergesch-Franséisch, Français-Luxembourgish*. Esch-sur-Alzette: Editions Schortgen.
- Schanen, François/Lulling, Jérôme (2012): *Luxdico. Lëtzebuergesch-Englisch, English-Luxembourgish*. Esch-sur-Alzette: Editions Schortgen.
- Schanen, François/Zimmer, Jacqui (2012): *Lëtzebuergesch Grammaire*. Esch-sur-Alzette: Editions Schortgen.
- Statec (Le portail des statistiques. Grand-duché de Luxembourg)*: <http://www.statistiques.public.lu/fr/acteurs/statec/> (2015.2.1)
- Trausch, Gilbert (1992): *Histoire du Luxembourg*. Hatier.
- Trausch, Gilbert et al. (2003): *Histoire du Luxembourg*. Toulouse Cedex: Éditions Privat.
- Welschbillig, Myriam/Schanen, François/Lulling, Jérôme (2008): *Luxdico. Lëtzebuergesch-Däitsch, Deutsch-Luxemburgisch*. Esch-sur-Alzette: Editions Schortgen.
- Wolter, Fernand (2011³): *Alles an der Rei. Lëtzebuergesch fir de Beruff an den Alldag*. Luxemburg: Editions Saint-Paul.
- Zimmer, Jacqui (2008): *9000 Wierder op Lëtzebuergesch*. Luxemburg: Editions Saint-Paul.

(北海道大学大学院文学研究科専門研究員)